



沖縄キリスト教平和研究所

ニューズレター 第4号 2013年12月

巻頭言

所長 大城 実

ニューズレター第4号を送ります。

広島、長崎、沖縄に建てられたキリスト教主義大学に学ぶ学生たちに集まって頂いて直面する課題を共に検証し、平和を発信するイベントは組めないものかと可成り長いこと思い描いていた。それが意外な展開を見せた。スタッフの一人がその構想を述べたら、幾つかの大学の先生方が興味を示した。そして実現したのが「沖縄・長崎・広島から平和を考える学びあい」である。いわゆるキリスト教主義大学に限定することに拘った。キリスト教主義大学の「学生たちがそれぞれの学風を背景に…キリスト教とは何か、その社会的責任を問い合う」を狙いとしたかったからである。8月の最後の週3泊4日の日程で沖縄を会場に展開された。8大学から32名が参加した。学生の主導に任せた学び合いであったが、いい学びが出来たと思っている。一部の学生は解散後も話し合いを続け、3泊4日では日程が足りないと言主張し、来年は1週間の日程にし、もっと話し合える場を設定したいとの意見が出たそうである。初めての試みにしては成功裡に終わったと思ひ満足している。来年度の企画に期待したい。楽しみにしている。

日本キリスト教団の呼びかけで東日本大震災で被災した子どもたちを沖縄に迎え、学生ボランティアが活躍してくれた。子どもたちは渡嘉敷島の海を堪能したに違いない。「Act for 東北」及び「TEAM 琉球」の皆さんに心から感謝したい。

今年の4月28日は沖縄にとって二重に「怒りの日」となった。沖縄をヤマトの「独立」のためにアメリカに売り渡した日を安倍内閣は「解放の日」と命名し、祝賀会を開いた。そして沖縄は未だに米軍のやりたい放題の蛮行を強いられているばかりでなく、ヤマトも唯々とアメリカの奴隷になっている。その恨みを晴らす意図も手伝っていたと思うが、敢えてその4.28に憲法講演会を行った。講師は本学2代目学長の平良修氏にお願いした。「伊江島のガンジー、阿波根昌鴻」の働きと意味についてたっぷり話して頂いた。その生き方に学びたいものである。

本号のニューズレターには研究員の一人、古澤健太郎牧師にご執筆願った。氏は沖縄の教会史をご専門にしており、同志社大学新学部への博士論文を準備されており、その一部を紹介してもらった。沖縄にいて気付かない教会の歴史を気付かせる大事な研究の成果である。感謝したい。

(目次)

巻頭言

沖縄キリスト教会信仰告白制定問題から見る沖縄の異文化理解

第1回 キリスト教主義大学学生による沖縄・長崎・広島から平和を考える学び合い

東北キッズ保養キャンプ@渡嘉敷島
これまでの活動

慈しみとまことは社会正義と平和は口づなし
まことは地から萌えて正義は天から注がれます。

(詩編 85:11-12)

学校法人
沖縄キリスト教学院
沖縄キリスト教平和研究所
〒903-0207
沖縄県中頭郡西原町字
翁長 777 番地
TEL.098-946-1279
FAX.098-946-1312
<http://www.ocjc.ac.jp>
E-mail:ocpi@ocjc.ac.jp

沖縄キリスト教会信仰告白制定問題から 見る沖縄の異文化理解

古澤健太郎

(研究員、日本基督教団コザ教会牧師)

私は現在、日本キリスト教団コザ教会の牧師(伝道師)を務めています。同時に、2012年度までは京都にある同志社大学の神学研究科に在籍する学生でもあります。研究のテーマは「沖縄のキリスト教と固有信仰」で、戦前・戦後の沖縄におけるキリスト教と、ユタを始めとする様々な固有信仰群がどのように関わってきたのかを研究しています。

自分のテーマの中からも平和研究所の活動に関してなにかヒントになることがあるかもしれないと思い、今回はひとつの事例を紹介させていただこうと思います。

戦後沖縄のキリスト教は、1954年に世界教会協議会への参加を計画し、「信仰告白」という、教派の基本的な信仰を示すものを制定すると決議しました。そして同年、理事の一人であった比嘉盛仁が作成した「信仰告白」草案が理事会で承認されます。ところがそのおよそ1年後、顧問を務める外国人宣教師団がその信仰告白を批判する「意見書」を出し、撤回を要求します。

宣教師たちによる批判は、いくつかのことに焦点が当てられていました。一つは「理事会が非民主的に、本来持つ権利を越えて運営されていること」と、それに加えて、「宣教師団が蔑ろにされていること」が挙げられていました。そしてもう一つは「信仰告白が異端の教説を取り入れたものであること」でした。

資料などにあたっていると、確かに当時、組織運営上の問題がいくつかあったことがわかりますし、また、そのことについて自己批判を行なっている様子も散見されます。一方、沖縄の教会がアメリカ人宣教師の影響から脱却を模索していた時期でもあり、両者の関係が微妙なバランスの上に成り立っていたことも事実でしょう。

このような、言ってみれば政治的理由、運営上の理由が注目されがちなか、宣教師団が指摘するもう一つの問題点である、「神学的」理由であるところの「異端の教説」については、これまで深く考察されて来ませんでした。ここで指摘されている「異端の教説」とは、当時沖縄でよく知られるようになっていたスウェーデンボルグの思想を指しています。スウェーデンボルグは18世紀のスウェーデン、イギリスなどで活躍した科学者・神学者・思想家です。神秘主義的な思想やキリストに関する霊体験、霊界体験を多く語り、今で言うニューエイジ運動に大きな影響力を与えました。日本基督教団池袋西教会の牧師であった金井為一郎は、ちょうど信仰告白に対する批判を宣教師団が行った1955年に沖縄を訪れていますが、この時、彼が傾倒していたスウェーデンボルグの「霊界」についての体験を語るよう、糸満の教会から求められたということが日記に記されています。当時を知る方にお話を聞くと、今でもスウェーデンボルグの名前が出る場合があります。宣教師団の一つの目的は、当時沖縄で支持を集め始めていた「霊界のことを誇張的に力説する」ようなキリスト教に対する牽制でした。宣教師団の中心人物が本国アメリカに送った書簡の中には、「霊界」に関して彼らが危機感を抱いている様子が残されています。

沖縄キリスト教会理事会はこれに反発するものの、最終的に宣教師団の要求を全て受け入れました。外国人宣教師1名を含む5名の委員が2回の委員会を開き、当時はまだ合同する前であった「日本基督教団」の信仰告白と生活綱領を採用することを決議し、翌年の定期総会で承認されます。かつて信仰告白を起草した比嘉盛仁の名は制定委員会の中にはありませんでした。

この出来事は非常に多くの示唆を私達に与えてくれます。

ひとつは、沖縄におけるキリスト教の、あまり知られていないスピリチュアルな一側面についての考察です。宮古島保良においては、キリスト教のとある宗派が伝統的な信仰を否定しつつもその

機能を取捨するようによりて受容されたことが安齋伸によりて明らかにされています。一方、沖縄島において福音系キリスト教会の活動を取り上げた池上良正の著書などにはありますが、未だその研究は緒に就いたばかりといえるでしょう。なぜ当時、宣教師が危機感を抱くほどにスウェーデンボルグの思想を支持する動きが見られたのかということについて、私達はこれからもっと知る必要がありますが、沖縄のキリスト教研究においてこの分野が遅れを取っていることは否めず、今後の更なる研究が必要不可欠です。

もうひとつは、「異文化から見て、自分達の文化がどのように捉えられているのか」を判断することなのではないかと思ひます。信仰告白制定問題にあつては、草案作成者であつた比嘉盛仁牧師自らが、「もうあっさりとお破算にしましう。やり直せば問題はありせんから」と提案し、理事会は制定を無効と決議しました。宣教師の協力が必要不可欠と判断されていた当時の状況を鑑みても、この決断を現代から批判することはできないかもしれせん。しかし『沖縄キリスト教史』の中で著者の石川正秀が語つていふように、「自主独立の気概で長時間研究討議すれば、独自の告白、生活綱領を生み出すことができたのではないだらうか。」という意見も正鵠を射ています。なによりここで付け加えたいことは、「なぜアメリカ出身の宣教師がここまで強硬に反対しているのか。彼らは沖縄のキリスト教をどのような眼差しを以て捉えているのか」といふ、いわば「自己客観視」が必要だつたのではないか、ということなのです。

例えば、宣教師団から意見書が出された際、理事会は「特別報告書」と題された反論の文書を発表するのですが、そこに自らの神学に対する考察はありませんでした。唯一、「神学的に検討、研究し合う事を理事会が提案した」ことが一文だけ記されていますが、これもとどのつまりは「これを拒否し（中略）強権を發動して理事会の意思を無視し」と、宣教師団の姿勢を非難するのみにとどまるものでした。

このとき見落とされていたか、あるいはやむを

得ず放棄された課題は以下の三つの点であつたと考えられます。

- 1) 「なぜ信仰告白が彼らにとつてこれほどまでに受け入れられないものであつたのか」、「彼らのどのような文化背景によりてそれが起つているのか」といふ異文化考察。
- 2) 「私達の中でこれほどまでに彼らと相容れない思想が強く影響を持つようになつていふのはどのような理由があつてのことなのか」といふ自己客観視と分析。
- 3) 「その結果として私達沖縄のキリスト教と当時それを支えていたアメリカのキリスト教はいかなる止揚に辿り着くべきであるのか」といふ神学。

繰り返しになりますが、私はここで当時のいかなる批判、決議、判断、行動を非難するわけでもありません。それはこの問題に関わるすべての人においてのことです。厳しい状況、困難な時代に、各々が信じる最善の行為が積み重ねられたものと確信しています。

ですが、それでもなおこの事件を振り返り、かけがえのない歴史として私達の手引きとするならば、そこにあつた問題点とは、「自ら」に目を向けず、「他者」についての理解も深めようとしなかつたことだ、とまとめることができるでしょう。信仰告白制定問題の折、沖縄キリスト教会は彼我のいずれにも目を向けることができませんでした。これは今日にあつても、主の平和を目指す私達が教訓とすべき事件であつたはずです。

現代に至るも沖縄は様々なプレッシャーに晒されています。具体例を挙げればきりがなく、批判や侮辱にさらされることも稀ではありません。しかしそのような状況であるからこそ、その問題が沖縄にとってどのように大切なものであるかを相手に伝える努力を欠かさず、のみならず、批判や圧力の矛先を我が身へ向けるその「他者」が、「私

達」をどのように捉えているのか考察することもまた、必要不可欠なことです。「自治は神話」や、「たかりの名人」といった物言いに對し、憤って抗議するのみに留まるのではなく、そこに自己洞察と他者理解の深化が伴うことこそが重要なのです。

沖縄の平和研究がアメリカとの関係性に留まるものであってはいけませんが、しかし、世界情勢から鑑みてもアメリカを理解しなければ平和を語ることはできません。現在アメリカ軍の基地が沖縄にある以上、私達にはアメリカ理解が絶対に必要です。異文化コミュニケーション分野において創立以来高い評価を得る沖縄キリスト教学院で平和研究所が活動することの意義は計り知れません。

相手がいかなる文化、いかなる伝統、いかなる判断の下にあって、いかに私達というものを判断しているか、ということを知らずして、どのような相互理解も生まれはしませんし、ましてや、對話による平和の望むべくもありません。

どうか沖縄キリスト教平和研究所と沖縄キリスト教学院の働きが、仮初ではない確固とした世界平和への力強い一歩となりますよう、これからも祈り続けると共に、研究員としての活動を実りあるものにしてゆきたいと思ひます。

<参考文献・資料>

(資料)

「沖縄キリスト教会信仰告白」、1954年、10月14日。

「沖縄キリスト教会に対する宣教師団の声明」、1955年、9月5日。

沖縄キリスト教会理事会「特別報告書」、1955年11月28日。

「沖縄キリスト教会理事会記録」、1955年9月5日、1955年9月8日、1955年9月12日。

Letter from Thoburn Taylor Brumbaugh to

G.S. Willson, May 3, 1955.

Letter from Harold Rickard to Rev. Tameichiro Kanai, August 26, 1955.

Letter from Rev. Tameichiro Kanai to Harold Rickard, September 26, 1955.

Letter from Harold Rickard to Katharine Johnson about The Confession, August 29, 1955.

Letter from Harold Rickard to Thoburn Taylor Brumbaugh about The Confession, August 29, 1955.

(文献)

安齋伸『南島におけるキリスト教の受容』、第一書房、1984年。

エマニュエル・スウェーデンボルグ著、長島達也訳『真のキリスト教 上巻』、アルカナ出版、1984年。

古澤健太郎「信仰告白制定の経緯に見る「沖縄キリスト教会」の特質」

『基督教研究』第68巻第1号、49-61頁、2006年。

池上良正『悪霊と聖霊の舞台 沖縄の民衆キリスト教に見る救済世界』、どうぶつ社、1991年。

石川政秀『沖縄キリスト教史 排除と容認の軌跡』、いのちのことば社、1994年。

金井為一郎著、金井為一郎著作集刊行委員会編『金井為一郎著作集』第3巻、キリスト新聞社、1977年。

日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編

『日本基督教団史資料集』第3巻、日本基督教団宣教研究所、1998年。

大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』、弘文堂、1998年。

照屋寛範『沖縄の宗教・土俗』、出版社不明、1957年。

照屋寛範『キリスト猶生きて』、出版社不明、1967年。

照屋寛範牧師昇天二〇周年記念誌編集委員会編『恩寵の回顧』、沖縄バプテスト連盟、1988年。

与那城勇『琉球エデンの園物語』、琉球エデン会、1974年。

8月26日～29日

第1回 キリスト教主義大学学生による 沖縄・長崎・広島から平和を考える学び合い

沖縄は広島・長崎を、広島・長崎は沖縄を平和教育・平和発信のために視野に入れ、より豊かなものにしていくために実施する。キリスト教と平和について考察することをもう一つの柱とするため、参加はキリスト教主義大学に限定し、併せて参加大学間の日常的なネットワークを作っていくことを目指す。

「この計画には、二つのこだわりがあります。その一つは、キリスト教主義大学に限定したということです。キリストの福音を基盤に建てられた大学で学ぶ学生達が夫々の学風を背景にキリスト教とは何か、その社会的責任を問い合うことで日常とは違う学びの場を提供したいとの思いがあります。

本学及び本研究所は『沖縄・キリスト教・平和』この三つを基本キーワードにしております。沖縄でキリスト教を語り、平和を語ることは沖縄の現実に向かい合うことなしには抽象的に終るのではないかと危惧するからであります。その意味では長崎、広島も沖縄と共に日本における平和教育に欠かせない要因だと考えます。今回のテーマの設定はそこにあります。その第1回を沖縄で開催したいと思います。

沖縄戦の証言に聞き、68年もの間押し付けられてきた軍事基地の現状を実体験することを通して平和をつくり出す課題に気付き、取り組み始める契機になればと願っています。安倍政権にかわって憲法九条改正（悪）への動きが顕著になってきました。そのような政治の動きの問題性・危険性への問題意識を学生同志の議論の中で刺激し合って深めて欲しいと期待します。」（所長挨拶より）



伊江島・反戦平和資料館

《参加大学》

国際基督教大学、関西学院大学、西南学院大学、フェリス学院大学、広島女学院大学、上智大学、明治学院大学、沖縄キリスト教学院大学

《プログラム》

- 8月26日：南部戦跡研修、ビーチでバーベキュー
普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会に参加
- 8月27日：伊江島現地研修、辺野古訪問
- 8月28日：不屈館、対馬丸記念館見学
午後から講演、学び合い
- 8月29日：講演と学び合い

【講演】

講師：矢ヶ崎克馬氏（琉球大学名誉教授）
講演：広島・長崎・福島 知られざる核戦争

講師：神谷武宏氏（普天間バプテスト教会牧師）
講演：基地と教会～民の叫びは天に届いたのか？

【戦跡ガイド】

知念優幸（沖縄キリスト教学院大学学生 TEAM 琉球）

その他開会礼拝説教、閉会礼拝説教、グループワーク司会、2日目学び合い司会、スタッフシャツデザインを各大学の学生が担当した。

参加学生の感想

沖縄キリスト教学院大学 2 年生
茅野 唯

今回この学びあいに参加して、始めは初対面の仲間に緊張していました。ですが、同年代の仲間と共に学びあい、分かち合うことは、とても刺激的で、本当に楽しい 1 週間でした。いろんな人といろんな話をするにつれ、お互いに打ち解け、より深い話もできました。

今まで私は、平和学習は想像力が大切だといわれてきました。実際にその土地に立ち、体の全てを使い当時の様子を想像しようとする、今までの感覚をぶち壊されます。聞くだけでは決してわからないものが、少しだけ現地にはある気がしました。



この学びあいのころ、私は自分の中でどのように沖縄の問題に向き合えばいいのか悩んでいました。様々なジレンマと自分との闘いで、堂々と向き合うことが出来ずに、考えることをやめていました。みんなが 1 人の人として、心地よく、笑って生きられる社会にするにはどうすればいいのか、考えてもかんがえてもなにも分かりませんでした。しかし、私は辺野古や高江、普天間基地ゲート前で人生をかけて闘っている人たちを知っています。毎日毎日不安で、毎日毎日闘っている。「沖縄を愛している」「これから後の時代、こんな社会を残さないように」そんな想いで、闘っている。私には考えられずにはられませんでした。彼らはみんな沖縄が大好きで素敵な人たちだからです。

闘う人の気持ちも、闘えない人の気持ちも、アメリカ兵の気持ちも、その家族の気持ちも、みんな

なが納得のいくような社会を創るようにはどうすればいいのでしょうか。私は本当にわかりません。でも、今回のこの学びあいでは私はいろんな人に会い、語りあうことで、自分は一人ではないということに気づかされました。いつも一つのことを考え込むと一人で考えてしまう私に大切なことを教えてくれました。この社会は一人で生きているのではない。今回の学びあいが、なんとなく心地よかったのは自分と同じような考えを持ち、本気でどうにかしたいと考えている若者が集まったからかもしれません。だけど、別にみんな同じ考えでなくてもいいと思います。100 人の人間がいれば 100 通りの考えがあることは当たり前です。ただ、私は今回の学びあいでは、今本当に必要なのは私たち若者の声だということに気づきました。今まで必死で闘う人たちがいたおかげで、今日も私たちは沖縄に生きることができています。30 年後、私たちの社会はどうなっているのでしょうか。

この学びあいでは初めて会う仲間といろんなことを話す中で、私はみんなで一緒に、みんなが心から笑って生きられる社会を作っていきたいなあと思いました。それと同時に仲間って本当にいいなあと実感し、多くの人にこのような機会があればいいなと実感しました。

きっかけは自分たちで作ればいい。考えるだけではなく、立派な体があるんだから、自分の体をとことん使ってどんなに小さなことでもいいから、行動していきたいと思いました。

全ては始めの一歩だと思います。これからも仲間がいるということを感じて、色々なことと向き合っていきたいです。

今回出会えたすべての人に、そしてこのような機会が与えられたことに感謝しています。



東北キッズ保養キャンプ@渡嘉敷島

8月7日～11日



日本基督教団東日本大震災対策実施本部と共催で、東日本大震災で被災した東北の子どもたち約20名を迎え、本学の学生ボランティアの協力を得て保養プログラムを実施した。渡嘉敷島の自然の中で思う存分体を動かし、また沖縄戦の学びも行った。参加したボランティア学生は Act for 東北、TEAM 琉球のメンバーたちであった。

《プログラム》

- 8月7日 首里城見学
- 8月8日 渡嘉敷島巡り(戦跡)、バーベキュー
文化体験(エイサー)、テント泊
- 8月9日 海洋研修、スポレク大会
- 8月10日 海洋研修、那覇で買い物
- 8月11日 礼拝、分かち合い、午後の飛行機で
仙台に向けて出発

福島と沖縄のつながりは意外と古い。今や観光の目玉ともなってきた沖縄のエイサー。お盆に欠かせない沖縄の伝統的な踊りであるこのエイサーの起源は400年ほど前にさかのぼる。現在の福島県いわき市出身の高僧・袋中上人(たいちゅうしょうにん)が、経典を得るため中国(明王朝)を目指し、その途中で琉球に辿りつき、3年間琉球に滞在した。その間、袋中上人が琉球で浄土念仏の布教をするにあたって、出身地いわきの「じゃんがら念

仏踊り」を用い、これがエイサーの起源となったという説がある。

沖縄ではかつて人が死ぬと念仏僧を家に招き、僧は鉦や太鼓を打ちならし念仏を誦しながら踊ったという。じゃんがら念仏踊りを原形とし、長く盆行事として仏教僧によって伝えられたきた踊りは、いまやエイサーとして地域の青年たちのよって担われている。

死者を弔う心と振るまいによって出会った沖縄と福島は、今また多くの命を奪う脅威によって出会い直していると言ってよいだろう。

保養プログラムで行なったことがある。それは沖縄の戦跡学習や米軍基地に関する学び。放射能の影響から遠く離れて、南国の豊かな自然の中で心も体もリラックスしてもらおう。それは第一に目的とするところだが、同時にその沖縄は沖縄戦によって本土決戦に備えた捨て石とされ、戦後は米軍占領下で人権も無きに等しい27年間を過ごし、「本土復帰」後も国土面積0.6%の土地に在日米軍専用施設の74%が今なお集中するという構造的差別の中に置かれた土地でもあるのだ。そのような側面にもしっかり目を向けることが保養プログラム主催者の願いでもあった。

渡嘉敷島で数日を共に過ごした中学生が言った言葉が忘れられない。「沖縄の海はきれいですねえ。ぼくのところはガレキばかりですもの。今でもタコを切ったら髪の毛が出てきますもの」。数えきれない遺体で埋め尽くされた沖縄の海岸も今では美しくよみがえっている。しかし、放射能に汚された福島の海はあとどれくらいの年月を待てばよいのだろうか。国家の都合で失われた命と自然、依然として粗末にされ続ける命、命こそ宝と訴え続ける人々の声に耳を貸さない政府、いま沖縄と福島は同種の差別と苦しみを負わされたものとしてますます深く結び合っていきたい。

【これまでの活動】

○ 主催行事

2013年 講演会

講師：加藤哲平氏（客員研究員、同志社大学院神学研究科博士課程後期課程）

3月24日①ヘブライ・ユダヤ・イスラエル～現代イスラエル、ユダヤ教とそれを取り巻く諸問題

②キケロからヒエロニムスへ～西洋古代の翻訳論における意識と逐語訳

4月28日 憲法講演会

講師：平良 修氏（第2代学長・本短期大学名誉教授）

講演：平和憲法9条の実現を目指して
ー沖縄・伊江島のガンジー阿波根昌鴻さんとともにー

○ 共催行事

2012年

11月18日 植民地主義とキリスト教

講師：饒平名長秀氏（沖縄バプテスト連盟牧師）

「沖縄の出エジプトは可能か」

講師：金永秀氏（沖縄キリスト教学院教授）

「植民地主義の韓国教会とキリスト教への影響」
《沖縄キリスト教協議会に協力》

2013年

土井敏邦さんとともに

パレスチナ、福島、沖縄をつなぐ映像とトーク

1月24日 沖縄大学ミニシアター

上映：「ガザに生きる」

講演：パレスチナとオキナワ～占領下に生きる人々

1月25日 沖縄キリスト教学院

上映：飯舘村第一章～故郷を追われる村人たち

講演：日本の中のパレスチナ～飯舘村

《日本キリスト教団沖縄教区、沖縄大学地域研究所、沖縄YWCAと共催》

6月7日 憲法学習会

講師：中原俊明氏（本学学長）

講演：危機の中の憲法と裁判所

「日独裁判官物語」の上映

《沖縄宗教者9条ネットワークと共催》

6月15日 図書館主催講演会

講師：蟻塚亮二氏（メンタルクリニックなごみ所長）

講演：沖縄戦トラウマによるストレス症候群

《沖縄キリスト教学院図書館と共催》

6月26日 学習会

テーマ：今、領土問題をどう学ぶか

～日本(沖縄)・韓国・台湾の共通教材づくりの
試みから～

基調報告：山口剛史氏（琉球大学）

「領土問題をどう教えてきたか」

実践報告：朴三恵氏（建国大学校）

「韓国での領土紛争授業の取り組み」

実践報告：楊素霞氏（南台科技大学）

「台湾での領土紛争授業の取り組み」

《アジア平和と歴史研究所・沖縄県歴史教育者協議会と共催》

7月13日 憲法講演会

講師：加藤裕氏（前沖縄弁護士会会長）

講演：憲法の危機、日本の危機

《沖縄宗教者9条ネットワークと共催》

10月11日 東日本大震災講演会

講師：村上真平氏

講演：自然と共にあった飯舘村の生活

～原発事故が奪ったもの～

《日本キリスト教団沖縄教区と共催》